

みんなで 「ちょっと間違えよう」

失敗から人は成長する。
「間違えて当たり前」のゆとりを

作家 いしだいら 石田衣良 × ジャーナリスト いけがみ あきら 池上 彰 (聞き手)

10代の若者から中高年まで、今を生きる様々な世代、様々な立場の人々の人生の機微をリアルに描くことで定評のある、作家の石田衣良さん。2006年2月から約9カ月間、中日新聞・東京新聞など地方紙数紙に連載された『5年3組リョウタ組』(角川書店)は、25歳新人教師・中道良太の成長物語をつづる中で、学級運営の課題、保護者や同僚との人間関係、今の教師に求められている時代の要請を取り上げ、連載中から話題に。執筆にあたり現場取材もしたという石田さんに、現代の若者像、学校教育への希望などを伺いました。

●「自分には書く方面に適性がある」と、感じさせてくれたのは学校教育です

池上 石田さんは、どのようなきっかけから、小説家の道に入られたのですか。

石田 これが学校教育の影響が大きいです。小学生の頃、作文や読書感想文を書く時、先生が区コンクールなどに出すでしょう。クラスの中で選ばれたりして、そういうのがすごく得意でした。「自分は書く方面に適性があるんだな」と、子どもながらに感じていました。

池上 先生にほめられて励みになったとか。

石田 はい。それはすごく嬉しかった。小中学生対象の全国俳句コンクールにも応募してくれて、賞をもらいました。確か、「夏休みに俳句を作る宿題を出します」と先生が言うのを聞いて、その場で机の下でササッと作った句でした。

池上 よくわかります。私も時々、締め切りを目の前にして文章をひねり出すという苦肉の策をやりますが、時間がある時に思いつきで書いた文章の方が、いい出来だったりします。

石田 プレッシャーがないと伸び伸び書けますものね。逆の場合もまたあります。

それと、家の近所の図書館に児童室ができて、そこに通ううちに本に夢中になった、ということも影響しています。それがちょうど7歳の頃で、その時に「作家になろう」と思いましたから。

池上 ほう、それは早いですね。

石田 だからといって、人生そんなにうまくはいきません。僕是要領のいい生徒で、クラス委員や生徒会の議長を毎年のようにやっていたんです。議事進行に采配をふるったりして。

ところが高校に入ったから、そういう優等生的な



●石田 衣良 (いしだいら) さんのプロフィール
1960年東京都生まれ。成蹊大学卒業。広告代理店勤務後、97年『池袋ウエストゲートパーク』でオール読物推理小説新人賞を受賞し、作家デビュー。03年『4TEEN フォーティーン』で直木賞、06年『眠れぬ真珠』で島清恋愛文学賞を受賞。近著に『6TEEN シックスティーン』『チッチと子』ほか。

ものが全部イヤになってしまった。授業は受験対策で面白くないし、小説を書きたいのに、そういう面で先生は頼りにならない。「これは自分で自分を教育しなければいけない」と、考えました。

池上 自分で自分を教育とは、すごいですね。

石田 まず、本を系統立てて読むことから始めて、数学、物理、化学は捨ててしまった。

池上 その点は私と共通するな(笑)。

石田 でも、そんな僕でも生かしておいてくれるんですから、世の中は優しいですよ。

池上 歯車には遊びがありますよね。ガチガチだと動かない。物事も同じで、遊びを作るとうまく回る。

石田 僕なんか、歯車の遊び作りに、何年も血道をあげていたようなものです。大学にも行きましかたけど、その頃は世に出ている作家がみんな化け物に見えた。手の届かない存在でしたね。それで、卒業したもののフリーターになったんです。

あの頃、フリーターになるとするのは、一種、

憧れの選択だったんですよ。就職した友人に言われました、「自由で、稼げて、楽しそうではないな」って。アルバイトだけで、新卒の初任給より稼げて、しかも、会社員になろうと思えば、どこかしらに就職できた。

池上 今では考えられない時代でしたね。

石田 本当に。そうしていたら、突然、母が倒れて亡くなったんです。その時初めて思いました、「就職して会社員になろう」って。

池上 広告代理店のコピーライターになられたんですでしたね。

石田 はい。代理店やプロダクションを転々としてましたね。で、気がつけば30歳。すると、今度は何だか会社員をしているのが、退屈になっちゃったんですよね。会社を辞めてフリーランスになりました。

そうしたら、1日に1、2時間仕事するだけで、割といい収入になったんです。そういう時代でした。結婚して、東京の下町の月島に住んで、これが後に『ATEEN』という小説の舞台になりました。

のんびり楽しく暮らしてましたけれど、ある日、「ああ、何かちゃんとした仕事をしたいな」と、思ってたんです。そこで、「そうだ、子どもの頃の夢だった、小説でも書くかな」と。

池上 そういう夢を描く人は大勢いるだろうけれど、なかなか作家にはなれないですよ(笑)。

石田 もちろん、僕もさすがに簡単にいくとは思いませんでしたけれど、仕事柄、短い文を書かなければならないコピーライターにとって、長い文章を書くというのは憧れなんです。コピーライターから作家になった人もいます。

池上 林真理子さんもそうですね。

石田 何人もいます。うまくいってもいかになくともいいやと、気楽な気持ちで書き始めました。

● 現実には起きている事件を題材にすると、今という時代がよく見えます

池上 石田さんの作品には、若く魅力的なキャラクターが数多く登場しますが、いつもモデルがいるんですか。

石田 それが実は、僕はまったくキャラクターを造形しないで書き始めるんですよ。

作家の中には、キャラクター像を練り上げてから書く人もいますが、僕の場合は行きあたりばったり。「手持ちの中にこんな人物がいましたよ」みたいな感じなんです。「魅力あるキャラクターで読者を惹きつけよう」という気持ちで、まったくつかもありません。10年経つてようやく、「書く前に、キャラクターを造形しておかなければいけないんだな」ということが分かってきました。

池上 いえいえ、じゅうぶん魅力的なキャラクターになっていきますよ。その「手持ち」というのは、どういう意味ですか。

石田 自分が知っている人物や好きな人物です。そういう人たちが混ぜ合わさって、一人のキャラクターとなって出てくるんですよ。

池上 そして、小説の中で勝手に動き始める。

石田 そうなんです。書き始めると、いつの間にかキャラクターごとに役割が決まっていって、ストーリーの中で、その役割に応じた台詞をしゃべったり、行動したりしているんです。

ただそれは、小説の中だけの話ではなくて、現実の世界でも同じだと思うんですよ。たとえば、

政治家だって、政治家だからああやってうやむやな話し方をするわけで…。みんなそれぞれ、自分の役割に応じた話し方をしているんですよ。学校の先生もきつとそうなのかもしれません。先生らしいことを言っていたり、「先生、先生」と言われたりしているうちに、どんどん先生っぽくなっていくのではないのでしょうか。

池上 そうかもしれませんね。魅力あるキャラクターを作っていくには、普段の実生活において人間観察力を高めていく必要があるのでしょうか。

石田 たぶん、もともと人間を観察するのが好きな人が、小説家になるんでしょうね。話していることなんか、聞き耳を立てるまでもなく、耳に入ってきてしまう。

ある日なんて、地下鉄に乗っていたら、女の子2人がロシア料理の話をしていました。

「ほら、あのシチューみたいななの、なんだっけ」

「シチュー？ 赤いやつ？」

「そう、あれ、なんていうんだっけ」

「ええと…、ボロシチ！」

池上 面白い！ 「ボロシチ」が「ボロシチ」(笑)。

石田 がまんするのが、本当に苦しかった。

池上 教えてあげたくありませんね。

石田 本当に世界は、面白い素材の塊です。

池上 石田さんには、そういう若者たちを描くことによって、今の社会が見えてくるということがあります。

石田 あると思います。特に、現実には起きている事件を題材にすると、今という時代がよく見えますね。

私見ですが、2000年代の半ばくらいから、犯罪がみみっちくなりました。それまでは、人々

を縛っている社会的なシステムを欺こうとか、義賊めいた犯罪が世間をにぎわせたものですが、だんだん、下流の人が自分よりさらに下の人を騙すとか、無知にかこつけて詐欺を働くとか、矮小で粗暴な犯罪が増えたように思います。路上の引ったくりなんかもそうですね。

時代の変化は、街中の小さな犯罪によく現れます。そういうところを見てみると、世の中の人の気持ちの有りどころが見えてきますね。

池上 なるほど。

石田 それから、住んでいる人がすごく同質になっていくニュータウンのようなところの方が、たとえて言うとかや猫の残虐な殺害とかが多いんですよね。均質な中ではじかれるともっていき場がなくなるんでしょうね。でも、街に出ればいわゆるはじかれた人もみんな楽しそうに暮らしているし、「ああ、大丈夫だな。」って思えるんですよ。どんな人でも生きていっていい、という居場所が必ずあるのが街なんですよ。

池上 「こんな人もいるんだ」「こんな生き方もあるんだ」って、いろんな見方ができるといいですよ。

●バブル崩壊前とそれ以降の日本は別の国。当然、子どもたちの質も違うと思います

池上 ところで、石田さんの小説『5年3組リョウタ組』は、小学校を舞台に、新人教師が奮闘する物語ですね。石田さんにも小学生のお子さんが2人いらっしゃいますが、お子さんたちを見ていて、あの話を書こうと思われたんですか。

石田 それもありますし、多くは若手の先生数人に取材した話が土台になっています。



石田 衣良 氏

まず、ベテランの先生に話を伺ったら、「とにかく昔は余裕があった」と。「放課後には校庭で、子どもたちと

サッカーやソフトボールで遊べた」と。ところが今は、報告書や資料の作成があまりにも多く、まったく時間がとれないそうです。

池上 確かに、学校現場で話を聞くと、提出書類作成に追われているようです。

石田 はたから見ている分には、「現場の先生に、もう少し裁量を持たせて」と思っていますけどね。先生方がつらそうです。

池上 学校の先生は、文部科学省をはじめとして、都道府県や市町村、それぞれの教育委員会が要請する資料提出に答えなければならぬんです。

石田 なるほど。それで量も多くなるわけだ。先生方も大変ですよ。

それと、思うんですけど、大きく言ってしまうと、バブル崩壊以降、日本は別の国になったのではないのでしょうか。かつては、日本の経済成長率が7%、10%と右肩上がりです。それこそ「坂の上に雲がある」と考えられていた時代もありましたけれど、今や日本は低成長先進国です。バブル崩壊前とそれ以降では別の国になった。当然、子どもたちの質も違うと思います。

池上 なるほど。子どもたちは、どのように変容

したのででしょうか。

石田 「寄らば大樹の陰」志向が強くなり、「一番大きな母集団にいたい」と、考えるようになったと思います。激しい受験競争をくぐり抜けてでも、「最多集団にいたほうが安全だ」と、みんな信じている。でも実は今そこが危険なところでもあると思います。自分たちは大丈夫だと思っていたところがどんどん根ぐされしていくのが、今の時代なんです。ただ、中には目端の利く子がいるから、そういう子には最多集団とは別の道を歩いて行ってほしいですね。

池上 そういう子は日本を脱出して、アメリカなどへ行ってしまうことがよくありますね。

石田 そうなんです。そこが残念なところですが、少しずつでも目端の利く子を増やせばいいな、と思います。

池上 それには、どうすればいいでしょうか。

石田 いちばんいいのはですね、親が子どもへの過剰な期待を捨てることだと思います。

今、日本中の多くの親が、子どもを石川遼くんに出立てようとしているでしょう。辻井伸行くんが言うように、ピアノもすごいし。でも実際のところを言ってしまうと、ほとんどの子には、そこまでの才能はないわけです。それなのに、介入できる範囲を勘違いしている親が多いと思います。親の満足だけで、お金をかけて詰め込んで、子どもたちがかわいそう。子どもは親を満足させるために、親がいるときだけ一生懸命練習するものなんです。考えてみても、もともと子どもが持っている才能と、親が用意してあげられる環境と、どちらが強いかと言えば、やっぱり前者ではないのでしょうか。

池上 所詮、自分の子どもですしねえ（笑）。
石田 うちの子は自分と同じで大したことはない。そうやって自由にさせておいて、「本当に好きだ」というものが見つかったら、その時に支援するのが親としての役目のように感じますけどね。

●今の若い人たちが出した最適解は、「いちばん安全なところにいること」

池上 最近では、モンスターペアレントと呼ばれる保護者も出現しています。

石田 人間は、自分がされたことを人にやるんですよね。なので、基本的にモンスターペアレントは気の毒な人たちです。学校も過剰な反応をしないほうがいいと思うのですが。

池上 親も学校の先生に過大な期待をしすぎるあまり、いろいろと言いたくなるんでしょうね。

石田 僕はうちの子に言いますよ、「学校の先生の中にも時々、この先生、ちょっとしんどいなあ」って思う人がいる。でも、大目に見てあげようよ」って。

池上 「教師たるもの完璧な人物でなくてはならない」という教えは、「あの先生、ちょっと変わったいるなあ」と思った自分の方が悪い」と、子どもに罪悪感を抱かせかねないですね。「ああ、中には自分とは相性が悪い先生もいるよね」くらいが、子どもには救いになるかもしれません。

石田 子どもたちには、それくらいのゆとりを持って、先生たちのことを見てほしいですよ。

それと、親も先生も、みんなでもうちよっちゃと「間違える」ようにしたらどうでしょう。「間違えてはいけない。子どもたちを育てる以上、立派でなければいけない」そういう思い込みは、人間を小さくする。間違えたところから、人間は成長するんですから。

大人が間違える姿なんかを、時にはもつと、子どもに見せてしまってもいいと思います。そういう姿からも、子どもたちにチャレンジする気持ちや一歩踏み出す勇気を与えたいものですね。

池上 「間違えてはいけない、失敗してはいけない」とやっているから、新しいことに手が出せなくなる。新しいことをやらなければ、間違いようなんてないんですよ。「間違えて当たり前なんだよ」というメッセージを、先生へも子どもたちへも、送りたいですね。

石田 子どもも自分の人生もそうですけど、あまりにも多くを期待しないで、肩肘張らずに、もつとのびのび生きていくのがいいんじゃないですかね。そうしていく中で、大きな試練や仕事にぶつかったら、そこで頑張ればいいじゃないかと。

池上 それって、ラテンに生きようよってことですか。

石田 そうですね（笑）。それぐらいの気持ちでいいと思うんですよ。



池上 彰 氏

池上 子育てもみんなある部分では失敗するんですよ。完璧な子育てなんてあり得ない。失敗して当たり前なのに、「失

敗したら大変なことになる」と、親が非常に神経質になりすぎて、おかしなことになっていたりする。

石田 なりますね。だから、そういう風潮を払拭する意味でも、今いちばん手をつけるというのは、新卒採用だと思えます。あの大企業横並び新卒一括採用制度にうまくメスが入ると、受験競争も緩和されて、子どもたちへの見守り方も変わるんじゃないかな。

池上 かつてに比べると、だいぶ緩やかになりましたが。たとえば、秋季採用を導入する企業が出てきたりしています。

石田 ええ。ただ、就職までのスパンがもつと長くなると思います。大学を卒業したら何年間か、世界のあれこれを見る時間があるって、それから入社できるとか。いろいろな会社で経験を積めるとか。社会全体が、「20代後半で一生の仕事を見つければいいんだ」というスタンスになれば、もつという個性が出てくると思うんです。

池上 アメリカやヨーロッパには、大学を卒業して1年くらい世界を回って、それから就職するというケースが結構ありますよね。日本人には、「3月に卒業して、4月には企業に入社してなければダメ。どこにも所属していないと大変なことになる」という恐怖感がつきまとう。

石田 そうですね。結局、今の若い人たちが、この社会で生き残るために出した最適解は、先ほどもお話したように「いちばん安全なところにいること」ではないでしょうか。傷つかない、冒険しない、まわりの空気を読む、一人だけ目立たない、そして、組織に埋もれる生き方。

学校の先生たちも、案外そんな最適解を出してしまっているんじゃないかなあ。



『5年3組リョウウタ組』

涙もろくて純情で、でも「いまどき」の男子でもある若き小学校教師がいじめや学級崩壊、親の問題…など、現代の学校現場が抱えている教育問題に立ち向かいながら奮闘する物語

池上 そういふ最適解をみんなが求め出すと、日本の国力はどんどん落ちてしまいます。

出る杭は打たれるってやっていると、社会がだめになってしまいますよね。

石田 いや本当にそう思いますよ。でもある意味なかなか変わらないだろうな。

僕は、それは日本人特有の性質であって、時々これと言うと怒る人がいるんですが、ある種いじめは日本の国の病なんで絶対変わらないし、なくならないと思うんです。どの組織にも必ずと言っていいほどあることですし。

でも一方で、そういった調和を重視する心や、きめ細やかさが、日本人の優秀な勤勉さにもなっているんですね。たとえば、精密機械を作り続ける技術や、宅配便などのサービスの細やかさなどに表れている。

●新しい世代が生まれてくる限り、教育する側にも希望があります

池上 今年、たぶん日本は中国にGDPで抜かれます。でも、ちよつと調べたら、アヘン戦争時代は、中国のGDPの方が日本より高かったんですよ。毛沢東が出てきて中華人民共和国になってから、中国経済は停滞した。その間に日本が抜いただけで、今回は中国に抜かれるんじゃないかと…。

石田 戻るんですね。日本が良かったのは、た

だか100年足らず。だから、「中国に抜かれて日本には先がない」という世論は、大間違いだと思います。

何しろ日本には、経済成長率が1、2%でも、毎年新たな1兆円市場がいくつも生まれているんです。チャンスは絶対にあると思う。

池上 1%と言っても、もともと日本のGDPは大変な額ですから。毎年、新しい国が生まれているようなものですかね。

石田 本当にそうです。チャンスは絶対にある。ただ、「下を向いていたら、そのチャンスは見つからないよ」と、子どもたちには言いたい。みんなと一緒に同じ安全な道を行く。それももちろん一つの手だけど、それでもその中で窮屈で無理だになって子どもたちは、新しいチャンスを見て思い切つてぶつかってみたらどうだろう。たとえうまくなくても、飢えて死ぬようなことは絶対ない国なので。そこで自分の人生かけてみるってことも、生き方としてとつても面白いんじゃないか、と言いたいですね。

池上 なるほど。最後に学校の先生方へメッセージをお願いします。

石田 学校教育には希望があると思うんです。なぜかと言うと、子どもたちには可塑性がありますよね。成型前のプラスチックのように、器に応じて、自在に形を変えることができる。子どもたちが本質的に持っている、その柔らかさ、可塑性は、いつの時代でも変わらない。だから、新しい世代が生まれてくる限り、教育する側にも希望はあると思うんです。

それから、これは自分の職業柄のメッセージになりますが、たとえば「この生徒には書く才能が

ありそうだ」とか思っても、手を貸さなくていいと思います。参考になりそうな本を教えるくらいで。才能とは基本的に、放っておいても様々なマインナス条件を打ち破って出てくるものです。文学部の創作科みたいなところを見ると分かりますよ、創作を学問として教えるのがいかに難しいか。

池上 批評家や評論家は育成できても、小説家は難しいでしょうね。

石田 子どもの育て方には、いろいろな方針があると思います。「自分は今の体制をしっかりと守つて国が要請する子どもたちをちゃんと育てるんだ」という先生はその通りしっかりがんばってもらえればいいし、「自分はそれではイヤだ」という先生は、その先生なりの自由なやり方で教育してもいいんじゃないでしょうか。そして、クラスに一人か二人いる、「寄らば大樹」

じゃないような子ども、目端が利いた、見込みのありそうな生徒のことは、それこそ先生が、勝海舟じゃありませんけれど、どんどん引き立ててくれるといいですね。そうやっていろんなタイプの子どもたちをそれぞれの個性を活かしながら育てていって、みんなが成長できるように教育できたらいいですね。

池上 なるほど。今日はどうもありがとうございました。

● インタビュアー 池上彰さんのプロフィール

1950年長野県生まれ。慶應義塾大学卒業。1973年にNHK入社。報道記者として勤務。1994年から11年間「週刊こどもニュース」のお父さん役を務め、子どもたちにニュースをわかりやすく解説。2005年NHKを退職。現在はフリージャーナリストとして活躍中。著書に『わかりやすく伝える>技術』（講談社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など多数。

編集部より 石田衣良さん直筆サイン入りの著書『5年3組リョウウタ組』を抽選で3名様にプレゼントいたします。ご希望の方は、同送のアンケートハガキを弊社宛までお送りください。